

# ミナミアオカメムシによる大豆の子実被害に対する

## 数種殺虫剤の防除効果

西野 実

三重県農業研究所

三重県では、2007年以降、ミナミアオカメムシが分布拡大し、多くの作物に被害を発生させている。特に大豆では子実被害の多発が続いており、多収阻害要因として問題となっている。本種を含む吸実性カメムシ類の防除が重視されているが、大豆の栽培面積が大きい生産者・経営体からは、作業の省力化のため、少ない回数（1回ないし2回）で有効に防除する方法が求められている。

福岡県の試験では、大豆のミナミアオカメムシを対象として殺虫剤を1回だけ散布する場合、開花期30日後（9月下旬）の子実肥大期の散布が本種を含むカメムシ類密度の低減と被害粒の発生軽減に有効であるとされている（中村ら、2009）。そこで、同様の時期に1回防除する際、使用する殺虫剤の被害粒抑制効果を比較するためほ場試験を行った。なお、本研究は農林水産省委託プロジェクト「多収阻害要因の診断法及び対策技術の開発」により実施した。

試験は2015年と2016年に農業研究所内の大豆ほ場（品種：フクユタカ）で実施した。ジノテフラン液剤、エチプロール水和剤、エトフェンプロックス乳剤を供試し、対照区としてカメムシ類防除を行わない区（無防除区）を設け、各処理4反復の試験区を設定した。各薬剤の散布は2015年9月28日、2016年9月26日に動力噴霧器で行った。ミナミアオカメムシおよびその他カメムシ類の密度を9月上旬から10月中旬まで7日間隔で調査を行うとともに、試験区ごとの収量および被害粒の調査を行い、2か年の結果から殺虫剤ごとの被害粒抑制効果について比較を行った。

試験の結果、殺虫剤処理区ではカメムシ類の密度を抑制することができ、被害粒率も無防除区に比べ低減することができた。特に、2015年ではエチプロール区、2016年はジノテフラン区で被害粒率を最も低減できた。処理前のミナミアオカメムシ成幼虫数と被害粒率との関係から、ジノテフラン液剤とエチプロール水和剤による被害粒抑制効果は同程度と考えられた。また、処理後の成虫・終齢幼虫数と被害粒率との関係からエチプロール水和剤、エトフェンプロックス乳剤よりもジノテフラン液剤の方が被害粒抑制効果の持続期間は長いと考えられた。

The effect of insecticides to suppress the damage of soybeans by Southern green stink bug *Nezara viridula*.

Minoru Nishino

Mie Prefecture Agricultural Research Institute